

黄金の馬―借金まみれの

クズなオヤジを探し出す

まで帰れません―

【人物一覧表】

小林史也 (7) (27) ニート

小林明里 (3) (23) 史也の妹

小林則義 (55) 史也の父

清正 (29) 借金取り

豪 (24) 借金取り

立川デブ (48) コーチ屋

小林良江 (78) 史也の祖母

小林愛子 (50) 史也の母

阿部 (40) 依存症施設の代表

アパートの大家

ファーストフードの店員

雀荘の店員

雀荘の客

武 (55) 則義の知人を名乗る男

【あらすじ】

ニートの小林史也（27）は幼い頃、ギャング
ル狂の父・則義（55）に捨てられる。以来、
父を美化し、黄金の馬に跨って疾走する父の
姿を空想するようになる。

ある日、祖母・良江（78）から、20年前に蒸
発した則義が東京で見つかったと知らされる。
良江は借金に追われているという則義に渡す
ための金を史也に託す。

気が進まない史也に対し、妹・明里（23）は
なぜか父との再会を楽しみにし、豪華な東京
観光の計画まで立てて旅に同行する。

しかし、約束の場所に則義は現れず、二人は
少ない手がかりをもとに則義を探すことにす
る。

その中で、則義の知り合いと名乗る男・武と
出会うが、良江から預かった大金を武に盗ま
れてしまう。

無一文となり途方に暮れる二人。それでも父
を探し続け、その過程で入手した一枚の写真
から、武こそが則義本人であったことが判明
する。

父の裏切りに明里は激怒する。父をかばう史
也へ、兄に恩返しすることがこの旅の本当の
目的だった、と明里は本心を明かす。

かつて史也は明里の学費のために働いており、
父親に代わって自分を育ててくれた兄に、明
里は密かに感謝していたのだ。

その頃、則義は借金取りに囲まれながら、競
馬場で人生最後の大会に打って出ていた。

それを知った史也と明里は競馬場へと急ぐが、
則義の賭けは外れ、則義はすべてを失う。

借金取りに追われる則義を、史也と明里もまた追いかける。明里は、父のせいで家族がどれだけ苦しんできたか、そして兄がそのすべてを背負ってきたことを叫び、謝罪を求める。

則義はついに観念する。だが、史也の中に父への愛情が溢れ出し、「最後まで逃げきれ！」と檄を飛ばす。その声を聞き、則義は再び走り出す。

史也が笑顔で見送る中、黄金の馬に跨った則義は、地平線のはるか彼方へと消えていくのだった。

○小林家・史也の部屋（夕）

小林史也（27）、勉強机に座り、指でスライスチーズをいじくっている。

机の上のガラケーが鳴る。

着信画面に「明里」。

史也「（出る）はい」

明里の声「あ、お兄ちゃん、久しぶり。元気？」

史也「まあ、うん」

明里の声「今家？」

史也「まあ、家だね」

明里の声「今大丈夫？」

史也「ちょっと厳しい」

明里の声「頼みたいことがあって。何してるの？」

史也「スライスチーズを折りたたんでる」

明里の声「（無視し）さっきおばあちゃんから

電話があって」

史也「うん」

明里の声「今そっちにきてるんだって」

史也「そっちって、どっち？」

明里の声「そっち。家のほう」

史也「ばあちゃんが？」

明里の声「急に連絡きて。家の近くまできてるからって。私に話があったみたいなんだけど、私そっちいけないじゃん」

史也「うん」

明里の声「お兄ちゃんさ、代わりにこれから

おばあちゃんに会ってきてくれない？」

史也「え。俺が？」

明里の声「うん。おばあちゃんにはこっちから話つけとくから」

史也「ムリだよ」

明里の声「どうせヒマでしょ？」

史也「ヒマではない」

明里の声「じゃ何してるの？」

史也「スライスチーズを…」

明里の声「（取り合わず）うん。じゃ頼んだ。

またあとで電話するから（と切る）」

史也「…」

○ラッキーパーピエロ・外観

函館名物のファーストフード店。

○同・店内

ウエスタン調のインテリアが施された
店内。

史也と祖母良江（78）がテーブル席で
向き合っている。

良江「（笑う）歳ねえ。明里さんが会社勤めで
札幌に住んでるの、すっかり忘れちゃって
て」

史也、居心地悪そうに座っている。

良江「史也さん、今仕事は何を？」

史也「（口ごもる）まあ、色々…まあ、色々と」
店員、やってくる。

店員「チャイニーズチキンバーガーのセット
お待たせ致しました」

良江「あ、私だわ。ありがとう」

店員、去る。

良江「チャイチキ、これ好きなの」

史也「…」

良江「（バーガーを手にし）お腹減っちゃったから頂くわ。あなたも何か頼んだら？」

史也「あ、大丈夫です」

良江、ついたソースを指チュパする。

史也「…」

良江「（食べながら）話したのはね、あなたたちの父親の則義（のりよし）のことなの」

史也「（動揺し）え？」

×

×

×

テーブルの上に録音レコーダー。

イヤホンをつけた史也、録音された会

話を聞いている。

男の声「…俺だ…俺だよ…」

良江の声「則義？ あんた則義なの？」

男の声「…そう…則義だ…お袋、頼む。100万

…振り込んでくれ…生きるか死ぬかの瀬戸
際に立ってる…」

良江の声「あんた、今まで何してたの？ 今どこにいるの？」

男の声「今：東京にいる：100万：いや、50万でも：とにかく金が必要なんだ：もう時間がない：早く金を手にしないと：」

音声、終わる。

史也、イヤホンを外す。

史也「あ、聞きました」

良江「どう？」

史也「いや、オレオレ詐欺とか：」

良江「私も疑ったんだけど、声は則義に似てるし、それにテープは途中で切れちゃったんだけど、この後に続きがあったね、あなたの好物は何か？と聞いたら、ちゃんと答えたの。フライドポテトって」

史也「：はあ」

良江「あの子、フライドポテトが好物だったから。でもそれだけじゃたまたま当たることだってあるでしょ。だから念を入れてどこの店のフライドポテトかって聞いたらち

ちゃんと当てたのよ。山城精肉店のフライドポテトって」

史也「…」

良江「でね、私はいったの。お金は渡してもいい。だけど直接会って顔を確かめないことには渡せない」

史也「…」

良江「とはいったもののねえ。この歳で東京にいくのはおっかなくなってる」

良江、バッグを漁る。

良江、バッグから封筒を取り出す。

良江「(封筒を差し出す)史也さん、東京にいらってこれを則義に渡ってきてほしいの」

史也「え」

良江「100万あるわ。私のなけなしのお金」

史也、戸惑って、

史也「…いや、でも、会っても、俺、顔とか覚えてないし…」

良江「平気よ。あなたたち、親子なんですもの。顔を見れば必ずわかる」

史也「…いや」

良江、ふいに涙ぐむ。

良江「バカ息子のせいでああなたが苦勞したのはわかる…でも…そんなバカ息子でも…私にとっては大切な一人息子なのよ…」

史也「…」

良江「史也さん、この通りです。どうかお願い
い」

良江、頭を下げる。

他の客、見ている。

良江、なお頭を下げ続ける。

史也「(慌てる)わかったからやめてください」

良江「(しれっと泣きやむ)そ、よかった」

史也「…」

○夜の大海原をゆくフェリー

○フェリー船内・デッキ

史也、海を眺めて黄昏れている。

○函館競馬場・スタンド（イメージ）

外れ馬券が散乱している。

客の去った場内にぽつんと取り残され

た少年と少女。

少年の史也（㉒）、妹の明里（㉓）の手を

ひいて不安そうに彷徨っている。

史也「（叫ぶ）お父さん！ お父さんっ！」

明里、疲れてその場にしゃがみこむ。

史也、泣きそうになるも叫び続ける。

史也「お父さんっ！」

その時、コースのゲートが開く。

ゲートから黄金に輝く馬に乗った騎手が現れる。

騎手、キャップとゴーグルで顔を覆い、

黄金の馬に跨がってコース場を颯爽と

駆け抜ける。

史也「（見て、息をのむ）」

○（戻って）デッキ

史也、ポケットからガラケーを取り出

す。

史也「圏外か…」

○同・ロビー

史也、公衆電話の前に立つ。

公衆電話の説明書を見る。

史也「30秒100円…ウソだろ…」

史也、ポケットから小銭を取り出す。

史也、受話器を持ち、何をいおうか考
えている。

史也「(よし)」

史也、百円玉を入れる。

史也、受話器のボタンを押す。

史也「(繋がる)あ。俺だけど指示通りに今フ
ェリーに…」

明里の声「お兄ちゃん？ ちょっと待って」

史也「…(もどかしい)」

明里の声「ゴメン、やかんの火とめにいつて
た。何？」

史也「時間がないから用件だけいうけど、指

示通りに今フェリーに（切れる）」

史也、受話器をおく。

史也「…」

○マンション・明里の部屋（札幌）

明里、スマホで話しながら旅行カバンに荷物を詰めている。

明里「（疑う）ホントに乗った？」

史也の声「乗ったよ。つか、そっちもついてくるなら俺がいく必要なかったし」

明里「女の一人旅は危ないもん。それより待ち合わせ場所、ちゃんと覚えた？ 東京駅の…」

電話、切れる。

明里「…？」

明里、鼻歌まじりで荷物を詰める。

明里、付箋の貼られた旅行雑誌ぶららを手に取り、それをカバンにしまう。

○夜行バス・車内

史也、太った男に挟まれて窮屈そうに座っている。

○東京駅の外（翌日）

行き交う大勢の人々。

ビル壁面の大型ビジョンには、ゴールデンウィーク初日の混雑ぶりを伝えるニュース映像が流れている。

○東京駅・構内

明里、旅行カバンを引いて歩いている。

史也、銀の鈴の前で待っている。

明里、史也を見つめる。

明里、いかにも田舎者な史也を見て笑みがかぼれる。

明里、不意打ちで史也の背中を押す。

史也「うお（と驚く）」

明里「やっほー。久しぶり」

史也、あか抜けた感じの明里を見てドギマギする。

史也「(ぼそり) よう」

明里「何それ？」

史也「え、いや：久しぶりだから」

明里「久しぶりに人と話したから？ (とから

かう)」

史也「は？」

明里「お母さん元気？」

史也「まあ、相変わらずだよ」

明里、史也へ手を差し出す。

史也「：？」

明里「おばあちゃんから預かったお金。お兄

ちゃんじゃ不安だから私が持つてる」

史也、ポケットから封筒を取る。

明里、受け取って、中を確かめる。

史也「使ってないって」

明里「(数えている)」

史也「：やっぱ俺こなくてもよかったんじゃ

ない？」

明里「(顔をあげる) じゃあ荷物預けてくる。

お兄ちゃん荷物どこ預けたの？」

史也「え、いや、俺、手ぶらで。用事すんだ
らすぐ帰るし」

明里「（呆れる）」

○喫茶店・外観

窓の外から黄色いハンカチが見える

○同・店内

史也と明里、窓際のテーブル席に座っ
ている。

黄色いハンカチが窓に貼られている。

史也と明里、窓の外を見渡す。

二人の前を通り過ぎていく人たち。

明里「…こないね」

史也、ジュースを飲む。

史也、ハンカチで、濡れた指を拭く。

明里「目印で拭かないでよ」

史也「…ごめん」

明里「…ねえ、もし本物のノリヨシがやって
きたらどうする？」

史也「いや、まあ、気まずいよね」

明里「だって20年ぶりの再会で初めてする
ことが現金の受け渡しだよ？」

史也「うーん」

明里「お兄ちゃん、ノリヨシに会うの楽しみ？」

史也「いや、全然だけど…」

明里「そうなんだ」

史也「え、楽しみなの？」

明里「楽しみっていうか、どんな人なんだろう
って。ノリヨシのこと何も覚えてないもん。

お兄ちゃん、覚えてる？」

史也「いや、どうだろう」

明里「ノリヨシの愚痴ならお母さんから散々
聞かされて育ったけど」

史也「…確かに」

明里、バッグを漁る。

明里、付箋が貼られたぶららを出す。

史也「…？」

明里「ちょうどゴールデンウィーク中だし、
ノリヨシがいい人そうだったら東京を見物

して回ろうかなと」

史也「…いや、借金があるって話だけど」

明里「そこは親孝行だよ。私お兄ちゃんところがって貯金あるし。働いてるから」

史也「…」

×

×

×

史也と明里、窓の外を見渡す。

二人の前を通り過ぎる人たち。

×

×

×

明里、スマホで電話をしている。

明里「あ、おばあちゃん？ うん…こなかっ

た…うん、うん…」

史也、窓の外を見ている。

史也、ふいに視線を感じる。

史也、視線の先を見る。

明里「（電話を終え、史也へ）どうしたの？」

史也「いや…」

明里「おばあちゃんがいうには、電話の男はギャンブル依存症施設にいらって話してたんだって。調べたらこの近くには一ヶ所しかなかった。ダメもとでいってみない？」

史也「え。いいよ（と気が乗らない）」

明里「決定。ほら、いくよ」

史也「…」

○アジサイの家・事務所

アットホームな雰囲気のギャンブル依存症施設。

壁にギャンブル依存症をゼロに書かれたポスター。

史也と明里、座っている。

目の前に代表の阿部（40）。

阿部「ここの代表をやっている阿部です」

史也と明里、頭をさげる。

阿部「小林則義さんなら二ヶ月前までうちに入所しました」

明里「(ぼそり) …本物だったんだ」

阿部「(メモを渡し)これが一応小林さんの電話番号。以前かけた時はもう使われていなかったけど」

明里「…父の写真とかってありますか？」

阿部「どうだったかなあ。探せばあると思うけど。連絡先教えてくれれば、見つけ次第知らせますよ」

明里「お願いします。お兄ちゃん(と促す)」
史也「え？」

史也、鉛筆を手に取る。

史也、メモ用紙に自分の電話番号を書く。

阿部「そうだ。デブさんなら知ってるかもしれない」

明里「デブさん？」

阿部「ここの入所者で、小林さんとは仲良かったみたいだから」

阿部、電話をかける。

阿部「…あ、デブさん？ 後ろからジャラジ

ヤラと音が聞こえるけど：ほんと？ 小林
さんのことで話を聞きたいという人がいる
んだけど」

阿部、明里に受話器を渡す。

○パチンコ屋・店内

立川デブ（48）、パチンコ台の前に座っ
て大声で電話している。

立川デブ「小林さん？ 奴さんなら、前に会
ったときはヤミ金業者に追い回されてヒー
ヒーいってたぜ」

○アジサイの家・事務所

明里「居場所を知りたいんです」

立川デブの声「奴さんの出入りする場所は
一。鉄火場だけだな」

明里「鉄火場？」

立川デブの声「競馬場、競輪場、競艇場、雀
荘、パチンコ屋。府中に住めばギャンブル
には事欠かないからな」

明里「あの、住所と違ってわからないでしょうか？」

立川デブの声「奴さんのアジトか……」

○ぼろアパートの前

古びた建物を見上げる史也と明里。

明里「ここだ」

史也「……」

○同・外廊下

史也と明里、則義の部屋の前に立つ。

史也「(そわそわして)俺、やっぱり下で待ってるわ」

史也、踵を返そうとする。

明里、去ろうとする史也の腕を掴み、

構わずインターホンを押す。

史也「あ」

しばらく待つが、反応はない。

史也「留守だ。帰ろう」

と、アパートの前に黒塗りの車が止ま

る。

強面の二人、清正（29）と豪（24）が車から降りてくる。

清正と豪、則義の部屋の前にくる。

清正「（史也らを睨んで）何だ、お前ら？」

史也、明里「（ビビる）…いえ」

清正、ドアをガンガン叩く。

清正「小林さーん！ 小林則義さーん！ いるんでしょー！ お金を返してください！ い！ 小林則義さーん、人から借りたお金はちゃんと返しましょうね！」

大家、やってくる。

大家「あんたたち、うるさいよ」

豪「何だババア」

大家「この人ならとっくに夜逃げしたよ。まったく、こっちだって家賃踏み倒されて迷惑してんだ。さっさと帰ってくれ」

大家、去っていく。

清正「（舌打ち）」

豪「兄貴、どうします？ パチンコ屋辺り回

ってみますか？」

清正「おう。いくぞ」

清正、豪、車に乗り込む。

車、乱暴に発進する。

○東京競馬場・ダービースクエア

公園のような場所。

アスレチックで子供らが遊んでいる。

史也と明里がいる場所からはスタンド

内のコースが見渡せる。

史也、マクドナルドの袋を片手にハン

バーガーを食べている。

明里「結局、ノリヨシの手がかりはなしか」

史也「まあ、しょうがないよ。ばあちゃんに

は悪いけど」

明里「てか、東京にきてまでマック？」

史也、ハンバーガーの中のピクルスを

つまんで取り除く。

明里「しかもピクルス捨ててるし」

史也「競馬場っていえばマックだよ」

明里「…？」

史也「覚えてない？ 子供の頃、家族で競馬場にきたら必ずこれ食ってたの」

史也、一口嚙じり、じっくり味わう。

史也「うん。懐かしい」

明里「だから覚えてないって。私心歳だったもん。ノリヨシに捨てられたとき」

史也、ポテトを差し出し、

史也「食う？」

明里「…いらない」

史也、うまそうにポテトを食べる。

明里「(ぼそりと)なんか意外だな」

史也「え？」

明里「お兄ちゃん、東京きたの嫌々だったのに、ノリヨシのこと好きだったんだ」

史也「…いや、好きとかじゃなく」

明里、真剣な顔になり、

明里「…うちらよりギャンブルを選んだんだ

よね」

史也、ふっと笑い、

史也「母ちゃんはグチや悪口しか俺たちにい
わなかったけど、でも実際は違うんだよ」

明里「：」

史也「小学校でいやなことがあって俺が泣い
てたとき、ファミコンソフトを父は買って
きてくれた。パチンコから帰ってくると、
いつもオモチャの景品を俺にくれた。それ
に、こんな暑い日はさ、眠れないで父の部
屋にいくと、クーラーがガンガンに効いて
るんだ。そこでポーカーや花札をやった。
こいこいにオイチョカブ、ブラックジャッ
クもやった。優しくて、楽しくて、俺にと
って嫌な思い出なんかないんだよ」

明里「：」

史也「俺の中のノリヨシはさ、黄金の馬に乗
ってるんだ」

明里「：？」

○同・スタンド（イメージ）

少年時代の史也、幼い明里の手をひい

て彷徨っている。

とゲートが開く音がする。

史也、見る。

コース上に黄金の馬が現れる。

ゴーグルで顔を覆った小林則義（55）
が騎乗している。

その後方を、騎手に扮した清正と豪が、
大家が、立川デブが、祖母の良枝が、
鬼の形相で追走している。

史也の声「父を捕まえようとする者たちが一
斉に追いかけてくる。だけど絶対に追いつ
けない。どこまでもどこまでも駆けて、地
平線の彼方へと消えていってしまう…」

黄金の馬、颯爽と去っていく。

史也、魅せられている。

○（戻って）ダービースクエア

史也「そんな姿を想像すると、何か面白くて

（と笑う）」

明里「…」

×

×

×

史也、ゴミを入れたビニール袋を結ぶ。

史也「もう気が済んだろ。北へ帰ろう」

明里「お兄ちゃん（と身構える）」

史也「…？」

明里「…さっきからこっち見てる人がいる」

史也「…」

明里「ノリヨシかも」

史也、テキストに周囲を見渡し、

史也「そんなはずないだろ」

明里「わかんないじゃん」

史也「どっかのおっさんが明里をガン見して
るんだろ」

明里「違う。見られてるのお兄ちゃんだよ」

史也「え」

史也、振り返る。

貧相なナリの中年男が史也の視界に入
る。

二人、目が合う。

史也「…」

明里「(史也の様子に) そうなの？」

史也「…いや」

男、挙動不審になる。

明里「怪しい！」

明里、男の方へと歩き出す。

史也「(焦る) お、おいっ」

○同・建物内

テーブル席に史也、明里、男。

明里「そうですか。父にお金を…」

男「…」

明里「あの、お名前は？」

男「(ぼそり) …武」

明里「父はどんな人ですか」

武「…いや、よくわかんない」

明里「でも、武さんはなんで私たちのあとを？」

武「…奴の家の前を張ってたら、君たちの話が耳に入ってきて」

○ぼろアパートの前（回想）

武、電柱の影に隠れている。

アパートの外廊下に史也と明里の姿。

明里「あー。ノリヨシ、どこにいるんだろ」

○（戻って）建物内

武「：奴に会えるかと思って：」

一同、沈黙する。

明里「あの、よかったら連絡先交換してもらえませんか。私たちも父を見つけないので」

武「：携帯は持ってない」

明里「私たちの連絡先を教えてください。何か手がかりがあったら電話してください」

明里、バッグから紙とペンを取り出し、

明里「お兄ちゃん（と促す）」

史也「え。俺？」

史也、ペンを手にするが、書くのをためらっている。

と明里のスマホが鳴る。

明里「(史也へ)ごめん。おばあちゃんからだ」

明里、立ち上がり、席を外す。

史也「え？ おい」

史也と武、取り残される。

史也、紙に自分の電話番号を書く。

史也、そっと紙を武に差し出す。

武、無言で紙を受け取る。

二人の間に、何か緊張が漂っている。

史也、上目遣いでちらりと武を見る。

武、乾いた唇を噛みしめている。

史也「…」

武「…」

武、史也を見て、何かをいおうとする。

史也、思わず立ち上がる。

武「…」

史也「トイレ…行ってきます…」

テーブルの上には明里のバッグが置か

れたままになっている。

武「(バッグを見て)…」

×

×

×

明里、電話している。

明里「まだ会えてない：うん：うん。大丈夫
たって：兄も一緒だし」

明里、電話を切る。

史也、トイレから出てくる。

明里「(史也を見て)あれ？ 武さんは？」

史也「え」

明里、テーブル席を見る。

武の姿はない。

明里「(気づく)え。カバンは？」

史也「え」

明里、急いでテーブル席に行く。

武と共に明里のバッグが消えている。

明里「え！ ない！」

史也「マジで？」

明里「(遠くを見て)あーっ！？」

明里のバッグを抱えて逃げる武の姿。

○同・東門前

史也と明里、走っている。
が、すでに武の姿はない。

明里「(荒い息) お兄ちゃん、警察！」

史也「(荒い息) え？ 警察？」

明里、痺れを切らしてスマホを出す。

明里、警察に電話をする。

明里「お兄ちゃんは武を追って！」

○大国魂神社・境内

史也、へばっている。

明里、やってきて、辺りを窺う。

武、木陰にへたれ込んでいる。

明里「あそこ！」

武、びっくりして、逃げ出す。

その拍子に、武が盗んだ明里のバッグ
からぶららが落ちる。

明里「お兄ちゃん！ 早く！」

史也、追うが、もうへトへト。

×

×

×

明里のもとへ、史也、戻ってくる。

史也の手には一冊のぷらら。

史也「ぷららだけ取り返した」

明里「∴」

○ネットカフェ・店内（夜）

個室に明里。

パソコンで調べ事をしている。

「旅行先 盗難」で検索。

被害届を出す、クレジットカード会社に連絡する、など対処法が書かれた記事が表示される。

薄い仕切りで隔たれた個室から、

客「（荒い息）ハアハア、フシユルル∴」

明里「（気味が悪い）」

明里、個室を出る。

明里、史也の個室の前に行く。

明里「（小声で）お兄ちゃん？ 開けるよ」

明里、扉を開ける。

史也、缶チューハイを飲んでいる。

明里「（驚く）ちよっと?!」

史也「おう」

史也、柿ピーをつまむ。

明里「∴柿ピーまで」

史也「明里も食べるか？」

× × ×

カップルシートに史也と明里。

史也、缶チューハイを飲む。

史也「（見回して）カップルシートって結構広
いんだな」

明里「∴お兄ちゃん、うちらのおかれてる状

況わかってる？」

史也「（考える）まあ、ヤバイよね」

明里「∴」

史也「まあ、大丈夫だよ。ばあちゃんにはさ、
金はノリヨシに渡したっていいばいんじ

やないかな」

明里「そんなのダメだよ」

明里、柿ピーをつまむ。

明里「それに盗られたのはおばあちゃんのお金だけじゃない。私のカバン、財布、それに現金」

史也「いくら入ってたの？」

明里「…30万」

史也「(驚く)え。そんなに？　ほんとに金持ちなんだな」

明里、スマホを取り出す。

明里「…おばあちゃんには、ほんとのこと打ち明けるしかないよね」

史也「うーん」

史也、酔いが回り、眠たそう。

明里、ためらいがちに電話をかける。

電話、繋がる。

明里「…あ、おばあちゃん？…うん…え…うん、大丈夫。心配しないで…必ず父に渡すから…今？　夜景がきれいなホテルにい

るよ：うん：じゃあね（と電話を切る）」

明里、ため息をつく。

明里「（思い出して）あ。そうだ。施設の阿部

さんから連絡あった？」

明里、史也を見る。

史也、うたた寝をしている。

その手元にガラケー。

明里「お兄ちゃん、借りるよ」

史也「（もごもごと）うーん」

明里、ガラケーをいじる。

メール受信欄は「母」と「明里」で埋

め尽くされている。

阿部からのメールはない。

明里、何となく写真フォルダーを開く。

フォルダーに明里の写真。

明里の大学卒業時に撮った写真だ。

明里「（写真を見て）：」

○小林家・居間（回想）

小林愛子（50）、洗濯物を畳んでいる。

明里、神妙な顔でやってくる。

愛子「何？」

明里「お母さん、内定決まった」

愛子「そう。よかった。おめでとう（と顔が

緩む）」

愛子「：四月からは札幌で一人暮らしするこ
とになる」

愛子「これで一安心だわ。ほんとによかった。

あんたまでグズにならないで」

と寝ぼけ眼の史也、やってくる。

史也、冷蔵庫を開け、尻をぼりぼり、

麦茶をがぶがぶ。

で、去っていく。

愛子、そんな史也を冷たく眺め、

愛子「：でも、まあ、あなたの大学の学費を
払ってくれたのは史也なんだから、あんな
のでも役に立っただけマシね」

明里「（驚く）え？」

愛子「いってなかった？ 史也のバイト代で
あんたを大学に入れたのよ」

明里「…」

愛子、洗濯物を畳み出す。

明里「…お兄ちゃんが」

○（戻って）ネカフェ・店内

史也、眠っている。

史也「（寝言）大丈夫…」

明里「え」

史也「金なら…俺が何とかするから…」

明里、史也の寝顔をじっと見つめる。

○競輪場・スタンド

ナイトレースが行われている。

武、車券を握りしめて観戦している。

清正の声「やっとな見つけたぞ」

武、振り向く。

清正と豪が立っている。

清正「（にやり）もう逃がさねえ。小林則義さん」

ぎくりとする武。

その正体は則義。(以下則義と表記)

則義、とっさに逃げ出す。

豪「てめえ、待て！」

清正と豪、則義を追う。

清正ら、則義を捕らえ、取り押さえる。

清正「：500万だぞ。借りた金を返さねえと

どうなるかをこの場で教えてやる」

清正、ジリジリと則義に近寄る。

則義「：ま、待て。うまい話があるんだ」

○パチンコ屋の前(翌日・朝)

史也と明里、立っている。

明里「お兄ちゃん、いい？ 自分たちで武を探す。もうそれしか方法はない」

○パチンコ屋・店内

明里、客を見回して武を探している。

別の場所で、史也、客を見回して武を

探している。

が、武の姿はない。

史也、足を止め、パチンコ台を見つめる。

史也「…」

×

×

×

明里、客を見回して武を探している。

史也、パチンコを打っている。

明里「(気づいて) な、何してんの?!」

史也「いや、ちよつとやってみようかなって」

明里「(大声で) 何? 聞こえない!」

史也「(大声で) 金! 100万! 30万も!

取り戻そうと思って!」

明里「(大声で) 無理だよ! ギャンブルなん

かしたらノリヨシになるってお母さんがい

ってたじゃん!」

史也、両手で念を込める。

パチンコ台、フィーバーする。

史也「当たった!」

台から玉が溢れてくる。

史也「(明里へ)箱！」

明里「(焦る)え？ え？！」

×

×

×

史也の足下にパチンコ玉の詰まった大量の箱。

史也「いやあ。俺、才能あるかもしれない」

明里「…」

○多摩川競艇場・スタンド

レースが始まっている。

水上をボートが猛スピードで駆け抜ける。

史也と明里、絶叫している。

史也、明里「いけー！」

先頭のボートがゴールする。

明里、舟券を確かめる。

明里「当たってる！」

立川デブ、やってくる。

立川デブ「おう、よかったな」

明里「いわれた通りに買ったなら、ほんとに当たりました！」

立川デブ「だろオ？　じゃ（と手を出す）」

明里「…？」

立川デブ「コーチ料。四分六でいいよ」

明里「…」

○雑居ビル・外

史也と明里、麻雀店の看板を見上げて
いる。

○雀荘・店内

明里「お兄ちゃん、麻雀なんかできるの？」

史也「函館の雀鬼とは俺のことだ」

ボーイ、やってきて、

ボーイ「（史也へ）卓、空きました」

× × ×

史也、フリー客と卓を囲んでいる。

明里、不安げに後ろで眺めている。

史也「すみません。ポンです」

史也、牌をさばく。

史也「すみません。チーです」

史也、牌をさばく。

客「兄ちゃんよ。いちいちすみませんっていわなくていいって」

客、そういつて牌を捨てる。

史也、客が捨てた牌を見て、

史也「すみません。ロンです」

史也、牌を倒す。

客「(舌打ち)」

史也、客から点棒を受け取る。

史也、振り返り、明里にガッツポーズ。

○京王閣競輪場・スタンド(夜)

ナイターレース。

明里、スマホの電卓機能で計算し、

明里「当たればちょうど130万円になる」

史也「ここで決めるぞ」

史也、両手で念を込める。

明里「何してんの？」

史也「いや、パチンコで勝ったときこうして
たから」

明里「…」

○公園

ベンチに史也と明里。

野宿である。

明里「…バカだね、うちらって」

史也「（未練がましく）数字が一個ズレれたら
勝ってただけどなあ」

明里「…なんか、こうしてると昔思い出す」

史也「？」

明里「ベランダでよく星みてたじゃん」

二人、星を見上げる。

史也「…子供のころ、日本中の人が一円一円
俺にくれれば一億円になるじゃん、人生楽
勝じゃん、ってよく想像してた…でも、な

んでみんなが俺に一円くれるのかはまったく考えなかったな：」

明里「：何の話？」

史也「いや、俺と違って考えてるわけだろ、明里は。いい大学出て、いいところに就職して、どうしたら一億円もらえるかをちゃんと計算して生きてる」

明里「：」

史也「ほんと、偉いなあって（と笑う）」

明里「（笑わず）：お兄ちゃんは、私に実家に戻ってきてほしい？」

史也「実家に？」

明里「うん」

史也「いや」

明里「そうなんだ：」

史也「え。職場でイジメられてるの？ お局様？」

明里「そんなのいないよ。仕事は大変だけど、みんな優しいし、全部うまくいってる」

史也「じゃ、いいじゃん」

明里「…実家に戻ればさ、こうやってお兄ちゃんをつまんない話にかまってあげられるし。私だけだよ、かまってあげられるの。お兄ちゃん、友達いないし」

史也「…」

明里「それに、こんな残念な旅じゃなくて、ちゃんとした家族旅行にもいけるし」

史也「仕事はどうすんのよ」

明里「何でもいい。地元で就職すればいいし」
史也「せっかくいい会社入ったのに。そんなこといったら母ちゃんにぶちギレされるぞ
(と笑う)」

明里「…」

○厩舎

静まり返った小屋に二つの人影。

一人は則義。

もう一人は厩務員。

二人、馬房の前に立つ。

厩務員、濁った液体の入ったバケツを

馬の前におく。

○競輪場・スタンド（回想）

則義、清正と豪と話している。

則義「今度のレース、知り合いの厩務員と組んで八百長を仕込む。入念に準備した、絶対に確かな話だ。あんたらも乗るといい」

清正「（にやり）馬にカフェインか：いいだろう。その話、乗ってやる。その代わりに、もし間違いがあれば、その時はわかってるだろうな」

則義「：」

○（戻って）厩舎

馬、カフェインの入ったバケツに顔を突っ込む。

則義と厩務員、去っていく。

○府中駅・構内（翌日）

史也と明里、佇んでいる。

明里「もうお母さんに電話して助けてもらう
しかないよね」

史也「まあ、それしかないと思う」

明里「お兄ちゃん。よろしく」

史也「え」

明里、ぷららを読み始める。

史也「いや。無理だって」

史也、ガラケーをいじり、愛子に電話
しようかと悩んでいる。

とメール受信音が鳴る。

史也「施設の人からだ：」

明里も画面をのぞく。

画面に以下の文章。

「遅くなってますみません。小林則義さ
んの写真が見つかったので送ります」

続けて添付された写真が映し出される。

野球帽をかぶった武と、ハゲ頭の見知
らぬ男のツーショット。

メールにはさらに以下の文章。

「帽子を被っている方が小林さんです」

明里「(絶句)」

史也「∴これもうわかんないな」

明里「(史也を睨み) 気づいてた?!」

史也「いや、そんなわけないって∴」

明里「警察に知らせなきゃ」

明里、急いでスマホを取り出す。

史也「おい、それはまずいって」

明里「真犯人を教えないと」

史也「しょうがないって∴借金取りに追われ
てるみたいだし∴」

明里「∴」

史也「まあ、でも、予期せずとはいえ、ばあ
ちゃんの金が渡せたってことでいいんじゃない
のかな。結果オーライ的な(と笑う)」

明里、うつむき、

明里「(ぼそり) ∴私のお金は？」

史也「え」

明里「(怒って) なんでノリヨシをかばうの？

私のお金も一緒に盗まれたんだよ？ 30

万！ 実の父親に盗まれたんだよ？」

史也「…」

明里「私がどんな思いで貯めたお金か、お兄ちゃん全然わかってない！」

史也「…いや、そりゃ大変だったろうけど、でも、それは親孝行の金だって…」

明里「違うよ！」

史也「…」

明里「あのお金があれば、今頃、二人で東京の色んなところを見て回れた。二人でおいしいもの食べられてた」

史也「え？」

明里「父のことなんかどうだっていい。私を捨てた人のことなんかホントはどうだってよかった…あのお金は…お兄ちゃんのために使うお金だった…」

史也「…」

明里「私の学費、お兄ちゃんが払ってるって知ったときから、いつかお兄ちゃんに恩返ししようと思ってた…いい機会だった…」

史也「…」

明里「だから、大切なお金だった：その大切

なお金を、あの男に盗まれたんだよ！」

明里、ぷららを史也に投げつける。

明里、背を向ける。

×

×

×

明里、しゃがみこんですねている。

少し離れたところで、史也、ぷららを

見ている。

付箋が何枚も貼られている。

付箋の貼られたページには、「家族でオ

ススメ」「男の子にオススメのスポット」

などと書かれている。

×

×

×

時計は15時を回っている。

史也、明里のもとに行く。

史也「：腹、減らない？」

明里「…」

史也「少し金残ってるから、なんか食べたいもの買ってくるけど」

明里、返事をしない。

史也、困る。

とガラケーが鳴る。

史也、ガラケーを取り出す。

公衆電話からの着信。

史也、微かに動揺する。

明里「（見抜いて）…出なよ」

史也「え」

史也、少し考え、

史也「（出て）…もしもし」

則義の声「史也か？」

史也「あ、はい」

明里、立ち上がり、会話に耳を澄ます。

則義の声「言い訳はしない。許してくれとも

いわないし、許されるとも思っていない：

これから大一番のレースがある。俺はそれに勝つ。そしてこれまで俺がしてきたこと

のすべてを清算しようと思う」

史也「あ、はい」

明里「(焦れたい) 貸して」

明里、史也から携帯を奪う。

明里「小林則義さんですか？」

則義の声「明里か：大きくなったな」

明里「私のカバンと現金を今すぐ返してください」

さい。返さないと警察に通報します」

則義の声「信じてくれとはいわないが、あの

金は元手にして、今、180万まで増やした」

史也「(驚く)」

明里「何をいってるんですか？ 犯罪です。

返してください」

則義の声「それはできない」

○道

史也と明里、競馬場へと急いでいる。

則義の声「東京競馬場の最終レース。そこに

全額を賭ける。4と12の馬連。一点買い

：20年振りにお前たちの顔を見て、もう終

わりにしようと思えた。今日ですべてを清算する。これまでのすべてを：勝って、大金を手に入れ、お前たちに償いたい」

○東京競馬場・スタンド

沸き立つ大観衆。

ファンファーレが響く。

メインレースが始まろうとしている。

史也と明里、やってくる。

明里「購入をキャンセルさせなきゃ」

史也「もう間に合わない」

明里「そんな…」

史也、床に落ちている競馬新聞を拾う。

史也、指折り何か計算している。

明里「…お兄ちゃん？」

史也「(ぼそり)…2億だ」

明里「え？」

史也「180万。4と12の馬連。当たれば2億

だ…」

明里「…」

× × ×

コース場に競走馬が出揃っている。

4と12の馬、鼻息ムンムン。

清正と豪、眺めている。

隣に則義の姿。

清正「(馬を眺めて)おう。荒ぶってるなあ」

豪「やる気マンマンって感じっす」

清正「おい。カフェイン、ぶっこみ過ぎたん

じゃねえか」

則義「…」

清正「(則義へ)万一、外した時はわかってん

だろうな」

則義「…」

× × ×

どーんと場内がわく。

ゲートから馬が一齐に飛び出し、レー

スが始まる。

コース上で馬たちが疾走する。

× × ×

㇗と12の馬が好位置につける。

範義、固唾を吞んで見守っている。

× × ×

最終コーナー。

観客が熱狂する中、㇗と12の馬が後方から猛然と追い上げる。

史也も、明里も、息を吞んで見つめている。

㇗と12の馬、並ぶように先頭に立つ。

則義、汗だくで叫ぶ。

則義「いけ！」

そのまま㇗と12がワンツーファイニッシュ

シュしようとした瞬間――

ハの騎手、振り落とされて落馬する。
無人でゴールするハの馬。

×

×

×

則義、その場から逃げる。

清正と豪、気づき、

清正「(怒号) 待てこらァ！」

清正と豪、則義を追いかける。

×

×

×

則義、史也と明里の前にやってくる。

史也と則義、目が合う。

則義、そのまま二人とすれ違う。

則義の抱えていた明里のカバンが床に
落ちる。

○同・外

則義、停めてあった自転車をパクる。

則義、自転車を漕いで逃げていく。

清正と豪、車に急いで乗り込む。

と、後部座席にいる史也と明里の姿がバックミラーに映る。

清正「なんだてめーら！」

明里「私たちもあの男を追ってるんです！」

清正「ジャマだ！ 降りろ！」

窓の外、則義の姿が小さくなっていく。

豪「兄貴、急がないと！」

清正「(舌打ち) 出せ」

史也と明里を乗せたまま急発進する車。

○道

則義、自転車を必死に漕いでいる。

車、やってくる。

車、自転車に幅寄せする。

○車内

清正、窓から顔を出し、

清正「殺すぞコラっ！」

豪、ハンドルを切ってさらに幅寄せ。

窓の外、則義、今にも轢かれそう。

史也、ぎゅっと拳を握る。

清正「逃げられっと思うな！ もっと寄せろ！」

史也「(耐えかねて) や、やめろ！」

清正「あ?!」

史也「やめてください！ 俺が、金なら俺が代わりに払いますから！」

明里「(慌てて) ちよっ…」

史也「俺の父なんです！ だから、借金なら俺が…」

明里、史也の口を塞ぎ、

明里「(清正へ) 何でもないです」

史也「っ何すんだ」

明里「きつと暑さで頭やられちゃったんだね」

史也「俺は正気だ」

明里「ううん。見て(と窓の外を見る)」

幅寄せに耐えながら、必死に自転車を漕ぐ則義の姿。

明里「あれがうちの父だよ。うちらはい
つのせいで苦しめられたんじゃん」

史也「違う」

明里「そうだよ。あいつのせいでお兄ちゃん
は私のために働いて」

史也「(遮る) 違う！ 全部お父さんのため
だ！」

明里「…どういうこと？」

史也「…いい子してれば、いつかお父さんが
帰ってくると思ってたから。だからだよ。
お前のことなんか、ハンバーガーのピクル
スくらいにしか思っていない！」

明里「嘘だ！」

豪「(振り返り、怒鳴る) さっきからごちやご
ちやうるせえぞ！」

明里「…嘘だよ。寝言で言ってたもん。私の
盗まれた金は俺が何とかするって…心の底
じゃお兄ちゃん、私のほうが大事なんだよ」

史也「…ひと目見て、父だとわかった」

明里「…？」

史也「：武に会ったとき、ほんとは正体に気づいてた」

明里「何いってるの？」

史也「だから、わざと席を立った。明里のカバンを盗ってくれたらいいと願ってた」

明里、史也をビンタする。

史也「：」

明里、うつむく。

車、急ブレーキ。

窓の外、乗り捨てられた自転車。

清正「土手に逃げやがった！ 追うぞ！」

○多摩川・河川敷

史也と明里、やってくる。

清正と豪、則義をジリジリと追いつめている。

則義の背後は川だ。

明里「あっ！」

則義、川に足を踏み入れる。

則義、対岸目指して逃げていく。

豪「てめえ、ふざけんじゃねえぞ！」

清正「追え！」

豪「無理っす！ 自分泳げないっす！」

則義、夢中で逃げる。

則義、川の流れに足をとられ、ズボンがずり落ちていく。

明里、思わず川の前へ飛び出し、

明里「(叫ぶ) 待て！ 逃げるな！」

史也、則義の背中を見つめて：

○同(イメージ)

黄金の馬に跨がった則義が川を渡って
いく。

○(戻って)同

則義、なおを逃げ続ける。

明里「(則義へ叫ぶ)私、兄に愛されて育った！」

史也「…」

明里「あんなにかいなくても立派に育った！
あんなにか、私の人生に何の影響

もなかった！」

則義「…」

明里「でも、兄はどう？ ニートで、世間から冷たい目で見られてて、友達もいない。恋人もいない。お母さんからいつも煙たがられてる！」

史也「…」

明里「だけど、兄をそんなふうにしたのは誰？ 父親のあんたじゃない！」

則義「…」

明里「お母さんから毎日あんたのグチ聞かされて、妹の学費を稼ぐために働いて…お兄ちゃんね、疲れちゃったんだよ。自分の人生を歩き出す前に、へトへトになっちゃったんだよ！」

則義「…」

明里「謝れ！ お兄ちゃんに謝れ！ うちに謝れっ！！」

則義、観念したように足をとめる。

則義、ゆっくりと引き返す。

清正「よおし！　それでいい！　戻ってきやがれ！」

史也、則義と目が合う。

○同（イメージ）

黄金の馬に跨がった則義、立ち止まる。
騎手に扮し、馬に乗った豪が、清正が、
良江が、愛子が、明里が、猛然と則義
へと迫る。

○（戻って）同

史也、突然、駆け出す。

史也、清正と豪の体へ突進する。

清正「何すんだっ！」

史也、二人の体にしがみつく。

豪「離せ！」

史也、がむしゃらにしがみつきのながら、
声の限りに叫ぶ。

史也「お父さー！ーん！！」

則義「?!」

史也「走れっ！ 最後まで走り続けろ！！！」
則義「…」

○同（イメージ）

川の真ん中で黄金の馬がいなくな。
不敵に笑う則義の横顔を光が照らす。
則義が手綱を引くと、黄金の馬は向き
を変え、対岸へと走り去っていく。

○（戻って）同

則義、対岸へ着く。

則義、ズボンがずり落ち、ブリーフ一
丁の姿で土手を駆け上がっていく。

清正「追うぞ！ 車出せ！」

清正と豪、車へと急いで戻っていく。
明里、その場にへたれこんでいる。
史也、対岸を見つめ、ひとり微笑んで
いる。

○羽田空港・外観

○同・ターミナルビル

史也と明里、座っている。

史也、ハンバーガーを食べている。

史也「(ぼそり) ピクルスってうまいな」

明里、隣でふさぎ込んでいる。

史也、何となく気まずい。

史也「あー。そうだ。帰ったら仕事探さなき

ゃ

明里「∴」

史也「いや、ほら、来年はちゃんと東京見物

したいなと思って∴明里と一緒に」

明里、無視して立ち上がる。

明里「(そっけなく)じゃ、飛行機の時間だか

ら」

史也「え」

明里「チケット、一人分買ってないから」

史也「え？ そうなの？」

明里、ひとり歩き出す。

明里、立ち止まり、振り返る。

史也、すっかり狼狽えている。

明里、史也を見て、呆れたように笑う。

明里「早くこないとおいてっちゃんよ！」

史也「え」

史也、笑って明里のもとへいく。

二人、並んで歩き出す。

(完)